

組織的な指導で英語力の多層化に対応し、 4技能統合型の活動の充実も図る

併設型中高一貫教育校の石川県立金沢錦丘高校は、併設の中学校から入学する生徒と、高校から入学する生徒が混在するため、英語力や学習意欲が多層化しやすい状況にある。そこで、学年ごとに生徒の実態や課題を教師間で共有し、組織的な指導体制を構築。4技能統合型の言語活動を充実させ、パフォーマンステストも実施するなど、生徒が英語を使う場を数多く設けている。

組織的な指導体制

生徒の状態に合わせて学年ごとに指導を柔軟に変える体制に

地域の進学校である石川県立金沢錦丘高校は、2004年度に県立中学校を併設し、県内で唯一の公立の併設型中高一貫教育校となった。同年、文部科学省の研究開発校に指定されたことを機に、英語科では、英語4技能をバランスよく育成するため、6年間での系統立てた指導を行ってきた。堀義明校長は、指導方針を次のように語る。

「本校が目指す英語教育は、生徒が『なりたい自分』になるための学びです。生徒は、英語を学ぶ中で世

界に目が向くようになり、自国のよさや課題に気づきます。そして、英語を使って『なりたい自分』を描き、夢を追いかけることで、大きく成長していきます。生徒の将来を見据えてその成長を支える中で、結果的に難関大学の入試にも対応できる英語力が育まれると捉えています」

英語科では、6年間を見通したシラバスや学年共通の教材を作成し、各学年で組織的な指導ができるようにしている。その背景には、1年次の英語力や英語に対する意識の個人差が大きいことがある。

同校では、1つの学年に、併設中学校から内部進学をする生徒（以下、内進生）のクラスが3クラス、

高校から入学する生徒（以下、外進生）のクラスが5クラスある。併設中学校の英語の授業では言語活動に力を入れていることから、内進生は、英語を書いたり、話したりすることへの意欲が高い。ただ、英語の正確性には課題が見られ、加えて、英語への関心の度合いに応じて英語力が一極化する傾向があった。一方、外進生は、単語や文法の知識は一定のレベルを備えているが、英語運用の技能や意欲については個人差が大きかった。また、学年によってもその幅やレベルは異なっていた。

「生徒の英語力を分析すると、内進生は習熟速度が速い層と遅い層に分かれ、外進生の多くは中間層に

るといった状況でした。そのため、どの層を中心に授業を行えばよいか、その判断が難しく、学年によって指導を柔軟に変える必要もありました。そこで、学年内で指導の方針や内容の目線合わせをしっかりと行い、指導を進める体制が構築されてきたのです」（堀校長）

1年間の学習の見通しを 持たせ、目標意識を高める

教師間で指導の方針や内容を共有するためのツールがシラバスだ。毎年、英語科で指導の実績や課題を基に意見交換をして改訂し、生徒にも配布している。シラバスには、年間

の単元計画や定期考査の出題範囲などのほかに、CANIDORリストも掲載。4技能5領域の到達目標を具体的に示している(図1)。

CANIDORリストの活用の仕方は、個々の教師に委ねられている。例えば、英語科で1学年主任の宮下香先生は、速読の活動で、CANIDORリストのWPM(*1)を示してから取り組ませるなど、生徒の目標



校長
堀 義明
ほり・よしあき
教職歴36年。同校に赴任して7年目。



1学年主任
宮下 香
みやした・かおり
教職歴23年。同校に赴任して2年目。英語科。



2学年副主任
鈴木武秀
すずき・たけひろ
教職歴22年。同校に赴任して6年目。英語科。

学校概要

設立 1963(昭和38)年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約320人
2021年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、筑波大、お茶の水女子大、東京大、富山大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに148人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、法政大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ790人が合格。

図1 1年次 4技能5領域の到達目標

育てたい生徒像	英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけ、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を有し、生涯にわたって英語を学び続ける。
到達目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとし、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を身につけている。
Listening	事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。
	1分間80~100語レベルの日常的話題に関する対話などを聞き、概要や要点を捉えることができる。
Reading	説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。聞き手に伝わるように音読することができる。
	使用テキストレベルの英文を90WPM程度で読んで、概要や要点を理解することができる。
Speaking	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりすることができる。
	<interaction> ①日常的話題について、自分の意見を、理由を添えてパートナーと1分程度やりとりすることができる。②相手の意見に対して、相づちを打ったり、聞き返しをしたりすることができる。
Writing	<production> 日常的話題について、自分の意見を、理由を添えて1分程度話すことができる。
	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書くことができる。 自分の意見やその理由を15分で60語程度の英語で書くことができる。

※学校資料を基に編集部で作成。

意識を高めることに活用している。「『この目標を達成するために、この活動を行ってみましょうか』などと、教師間で指導について具体的に話し合い、共通理解を図って指導にあたっています」(宮下先生)

生徒の実態や課題を共有し、指導内容をすり合わせるために、学年ごとの教科会を週1回行うほか、教師間の日常的なコミュニケーションも大切にしている。英語科で2学年副

主任の鈴木武秀先生は、職員室での日々の会話が、指導改善につながることも多いと話す。「2年生は、模擬試験や英語の資格・検定試験の結果から、リスニングが課題であることが明らかになり、担当教師が話し合っただけでインゲを充実させるなど、対策を講じました。また、同じ単元の授業を先に終えた教師から、生徒の様子を聞き、自身の授業で指導を工夫した

り、定期考査の問題を考査実施の数週間前から検討し合ったりしています。指導と評価の両面で、常に教師間で綿密に打ち合わせをし、授業の質の標準化を図っています」

言語活動の充実

身近な話題から社会問題まで 現実の題材で言語活動を行う

授業で重視しているのは、英語4技能による言語活動の充実だ。

「相手の発言を踏まえて自分の考えを論理的に話したり、多様なデジタル機器を活用して思いや意見を発信したりと、広い意味での英語力の育成を図っています。生徒個々の英語力によって異なりますが、到達目標は、2年次はCEFRのA2~B1、3年次はB1以上としています」(鈴木先生)

言語活動を重視する方針が表れているのが、各学年で週1時間実施する学校設定科目「LC探究」(*2)だ。授業は、英語科教師とALTのチーム・ティーチングで行い、英語による論理的・批判的思考力の育成を目指して、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション、

*1 Words Per Minuteの略。1分間あたりに読める単語数のこと。 *2 LCは、Logical Communicationの略。1年次は「LC探究」、2・3年次は「LC発展」として設定。

図2 1年次「LC探究」の指導案(抜粋)

OBJECTIVES : To get the students to compare and choose a B&B they would like to stay at in New York.

MATERIALS : PC, Worksheet

PROCEDURE	TIME (MIN.)	ACTIVITIES		NOTES
		JTE & ALT	STUDENTS	
Activity 1 Mini Chat	5	Get the students to use the mini chat sheet with their new "paper partner". The Topic: "If you went on vacation, would you stay in the city or the countryside?"	Students speak to their paper partners and answer the topic question.	Mini Chat Sheet, Paper partner
Activity 2 Sawanoya & Through the Grapevine	10	Get students to watch 2 videos. One of Sawanoya from last week, one of an American B&B. Go over the T/F answers.	Watch the videos and answer the T/F questions.	Worksheet
Activity 3 Show Pictures, Reading	15	The ALT shows pictures of each B&B. Instruct the students to skim 4 travel writings, then read 1 more closely.	Students read the travel writing. Then they choose one B&B they like most and in more detail.	Dictionary, Worksheet, B&B Listings Worksheet
Activity 4 Writing	15	Students write about the following topic: <i>Imagine you are going to America. Which bed and breakfast do you stay at and why? What do you do there?</i>	Dictionary is allowed.	Dictionary, Worksheet

上図は、1時間分の指導案。

※学校資料を基に編集部で作成。

ライティングといった4技能統合型の活動を主体に展開している。

「本科目では、生徒が生活や仕事で活用できる英語力の育成を目指しています。そこで、英語を実際に使う場面を想定し、題材は、生徒にとって身近な話題から社会問題まで、幅広く扱っています」(宮下先生)

例えば、「旅行」の単元では、毎時間、ミニチャットから始め、日本とアメリカの旅行に関する記事や動画を見た後、正誤問題などに取り組

み、内容を理解した上で、題材に関連したテーマで英作文を書く(図2)。

そうした活動を毎時間積み重ね、単元の最後の授業に、旅行に行つたつもりで自分の体験をスピーチするといった展開にしている。

デジタル機器を活用し、4技能統合型の活動を展開

「英語表現」や「コミュニケーション英語」の授業でも、各技能を育成

する言語活動を展開している。

「聞き取った英文を踏まえた意見をペアで英語で伝え合うなど、『聞く、読む、話す、書く』のそれぞれの活動がスムーズにつながるようになっています。そうすると、例えばリスニングが苦手でも、ライティングを通じて題材への理解が深まるなど、各技能が補い合う形で英語力が高まることが期待できます。また、1時間の中で様々な活動を行うと、授業にメリハリが付き、生徒の集中力が持続しやすいことも利点です」(鈴木先生)

現在は、コロナ禍の影響で生徒同士の対面での活動が行いにくいいため、1人1台配布されているノートパソコンを活用した活動を行っている。例えば、グループごとに「Google Jamboard」(※3)の作業スペースを設け、そこにグループのメンバーが意見を入力し、グループ内で意見を共有。そうして考えを深めた上で、生徒個々が英文を作成し、それを「Google Classroom」(※4)で提出させるという活動を行った。

「デジタル機器を使ってもスムーズに意見交換ができていました。生徒にとっては、デジタルスキルの向

上につながり、教師にとっては、場所を選ばずに添削が行えるというメリットがあります」(鈴木先生)

英語力が多層化への対応

習熟度別の少人数授業を実施 課題提示やペア活動も工夫

2・3年次の「英語表現」は、定期考査の結果を基にクラスを2分割し、生徒の英語力に応じた少人数授業を行っている。教師も、それぞれに授業を工夫している。宮下先生は、難易度の異なる複数の課題を提示し、生徒が自分の英語力に合った課題に取り組めるようにしている。

「授業で各自がしっかりと力を伸ばせることに留意しています。複数の課題を提示することで、『もっと難しい課題に取り組みたい』といった学習意欲を引き出すねらいもあります」(宮下先生)

鈴木先生は、生徒のペアの作り方に配慮していると語る。

「英語力が多層化しているので、ペアワークが効果的なものになるよう、工夫しています。具体的には、英語力の差が小さい生徒同士を組み合わせるようにしています。生徒からは、

*3 電子ホワイトボードの機能を持つクラウドのアプリケーション。

*4 教師が出す課題の管理をサポートするツールで、課題の配信と採点、フィードバックの提供などの機能がある。

『友人から教えられて理解が進んだ』『自信がなかったけれど、頑張った教えた』といった前向きな声が上がっています」

パフォーマンステストの工夫

達成感を持たせ、自信を高める手段としても重視

学習評価では、パフォーマンステストを実施している(図3)。生徒には、テスト前にループリッパを提示し、目標を具体的にイメージさせることで、パフォーマンスの向上を促している。

学期に1回実施するスピーキングやプレゼンテーションのパフォーマンステストは、以前は、情報室のパソコンでヘッドセットを使って録音していた。しかし、コロナ禍の影響でヘッドセットの共有ができないため、現在は、生徒が各自所有するスマートフォンに録音させ、その音声ファイルを「Google Classroom」を用いて提出させている。

「提出した音声ファイルは、自身のスマートフォンに蓄積されるため、生徒は過去の音声を聞くことで、成長を実感できます」(鈴木先生)

図3 1年次 パフォーマンステスト(例)

- ①音読テスト 課題文の音読。
題材 テクノロジーと生活についての未来予測。
- ②リテリング キーワードを用いながら、課題文の内容を自分の言葉で再現する。準備時間1分間。解答時間1分間。
題材 デパートで売られていたライオンの赤ちゃんを購入する決意をするまでの説明。
- ③英作文 指定のトピックについて、意見・理由・サポートセンテンス・結論を、50語以上で書く。
題材 自分が動物だとしたら、動物園の生活と野生の生活、どちらが好きか。

※学校資料を基に編集部で作成。

ライティングについては、「英語表現」「コミュニケーション英語」「L C探究」のいずれにおいても、英文の添削指導に力を入れている。

「ライティングの技能の向上は、スピーキングやリーディング、リスニングの技能の向上にもつながるので、教科書に載っている課題文の要約や英作文など、ライティングの課題に取り組みせています。書いた英文は形として残るので、『英文をたくさん書けるようになった』『先生に修正される箇所が減った』『先生からよいコメントをもらえた』などと、過去の自分と比べて、自身の成

長を実感させるねらいもあります」(鈴木先生)

1・2年次は、7月と12月の年2回、「GTEC」を受検。その結果に基づき、教師は、授業の成果や課題を分析して指導改善を図っている。生徒にとっては、継続的なデータにより各技能の伸びを実感し、学習意欲を高める機会となっている。

「着目するのはスコアの高低よりも、前回のスコアからの伸びです。スコアが伸びた生徒は名前を発表し、学習の達成感を得られるようにしています」(鈴木先生)

情報処理的視点からの読解力の育成

シャドーイングと速読で、大量の英文を読み取る力を育成

21年度大学入学共通テストの英語では、多くの生徒が、教師の想定を上回る好結果を出した。それは、日々の学習の成果であり、特に、英文の意味を理解することを重視するコンテンツ・シャドーイングの実施が功を奏したと、同校は捉えている。

「単元ごとにコンテンツ・シャドーイングを実施しました。語数の多い英文を何度も聞き、意味を理解しよ

うとする活動を通じて、多少意味が分からない箇所があっても、英文の概要を素早く捉えられる力が鍛えられたのでしよう。結果として、大学入学共通テストのリスニングとリーディングの問題の双方に効果があったと考えています」(堀校長)

週1回の帯学習で行っている速読も、英語力の育成に効果的だったと考えている。

「基本的な読解力を育成するため、WPMを意識しながら速読をさせています。そうした学習を通じて、大学入学共通テストで出題されたような複数のテキストから必要な情報を読み取り、整理・統合することが求められる問題への対応力が培われていったのだと思います」(宮下先生)

今後も、英語4技能を活用する実践の場を想定した言語活動を授業で展開していく考えだ。

「英語の習得に何より大事なものは、『習うより慣れよ』ではないでしょうか。これからも、生徒が日常的な場面を想定しながら英語を使う機会を授業の中で数多く設け、自身の世界を広げるツールとしての英語の力を高めていけるような支援をしていきます」(堀校長)